和漢脩身書

山内貢編纂

一　二

第倫二號

檢文部省藏書
原三三九號
類
腐
一七函
六架
脩詞號
立冊

K110.1
299a
1

K110.1
299a

露光量調整、重複撮影

和漢修身書卷之一

稲垣千頴閲正
山内　賁編纂

第一章

○能く君につかふる
を忠といふ、忠
經

露光量調整、重複撮影

東京師範學校稲垣千頴先生閲正
竹溪山内貢先生編纂

和漢修身書

文學社刊行

昭51 文部省寄贈

和漢修身書卷之一

稲垣千頴閲正
山内　貢編纂

第一章

○能く君につかふるを忠といふ、忠經

○能く親に事ふるを、孝といふ、同上

○忠は國にすつへからす、同上

○孝は家にゆるふへからす、同上

○君子は親に孝なり、故に忠君に移すへし、孝經

○兄に順なり、故に弟長に移すへし、同上

○身體を傷けさるは、

孝の始なり、同上

○名を揚けて父母を顯すは、孝の終なり、同上

○父母の命には、違ふへからす、禮記

○父母の教誡に從ひて、怒り恨むへからす、同上

○父母の愛する所は、亦之を愛す、同上

○父母の敬する所は、亦之を敬す、同上

○親を愛する者は、敢へて人を惡まず、孝經

○親を敬する者は、敢へて人を慢らず、同上

○朝早く起くるは、家の榮ゆる兆、大和俗訓

○晩く起くるは、家の衰ふる基なり、同上

○貧者も勤によりて富み、齊家要言

○賤者も勤によりて貴し、同上

○身を立つるは、學を勉むるを以て先とし、五種遺規

○學を勉むるは、書を讀むを以て本とす、同上

○患は忽にする所より生し、後漢書

○禍は細微より發す、同上

○難あれは相助け、初學訓

○患あれは相救ふ、同上

○喜に乗して、言を多くすゝからす、薛文清語

○快に乗して、事を易るゝからす、同上

○善に習ゝは日々に樂しく、君子訓

○惡に倣ゝは日々に苦む、同上

○善を聞けは以て相告け、禮記

○善を見れは以て相示す、同上

○善ならさる人には交らす、大和小學

○義にあらさる物は取らす、同上

○善人を見てはこれに倣ひ、傳家寶

○不善人を見てはこれを改む、同上

○人の能くする所を嫉むこと勿れ、畜德録

○人の能くせさる所を形すこと勿れ、同上

○善く父母に事ふるを孝とし、論語註

○善く兄長に事ふるを悌とす、同上

○兄は弟に愛ふかく、初學訓

○弟は兄に敬あつし、同上

○父母の心に順ひてさかはす、同上

○父母の教へあらは、慎みてきくへし、同上

○老を貴ふは、その親に近きかためなり、禮記

○幼を慈むは、子の子に近きかためなり、同上

○人を愛する者は、人恒に之を愛し、孟子

○人を敬する者は、人恒に之を敬す、同上

○失意の人に對して、得意の事を談せず、願體集

○得意の日に處りて

は、失意の時を忘るゝこと勿れ、同上

○徳を施しては、徳とせさるを貴ふ、事斯語

○恩を受けては、必報ゆるを貴ふ、同上

○衣服を脱せは、齊整して箱に納れ、散亂すへからす、童蒙須知

○垢つきたる衣服は、屢洗澣して、清潔にするを要す、同上

○高き處に登るへからす、小學

○深き淵に臨むへからす、同上

和漢修身書卷之一終

和漢修身書卷之二

稻垣千穎閲正

山内　賁編纂

第二章

○孝悌忠信は、身を立つる大本なり、省心雜言

○林友直曰、悌とは兄を敬ひ、弟を愛することなり、
○常盤貞尚曰、忠は心の實なり、信は行の實なり、
○後漢の光武帝曰、志ある者は、事竟に成る、

○佐藤坦曰、眞に大志あるものは、克く小物を勤む、
○又曰、眞に遠慮ある者は、克く細事を忽にせず、
○貝原篤信曰、君に仕へては、忠を盡し私を忘れて、我

か身を顧ること勿れ、

○子たる者、國家の法度を慎守して、犯さゝる、是亦親に孝する道なり、童子習

○伊藤長胤曰、人行義を修め、生産を治め、身體を保つ、

此の三の者、人道の因りて立つ所以なり、

○薛文清曰、日用の間、纖毫の事も、皆當に謹慎すべし、

○吾か能に矜るは恥なり、吾か不能を飾るも亦恥な

り、畜德録

○喜ふ時の言は、多く信を失ひ、怒る時の言は、多く體を失ふ、傳家寶

○常盤貞尚曰、口に慎まされは、禍の門となる、

○善を積む家には、必餘慶あり、易經

○不善を積む家には、必餘殃あり、同上

○親に事へて孝ならは、君に事へて忠なるへし、古文孝經

○父母に孝なく、兄に悌なきものは、萬卷の書を誦し、多能多藝なりと雖、何の用をか成さん、日新館童子訓

○德川秀忠曰、善人と交れは、善ならざるはなく、惡人と居れは、惡ならざるはなし、

○今川貞世曰、己に勝る友を好みて、己に若かざる友を、好むこと勿れ、

○人を責むる者は、交を全くせず、自怨する者は、

過を改めず、省心雑言

○孔丘曰、過ちては、改むるに憚ることなかれ、

○賈誼曰、善は小なるも、益なしといふべからず、不善は小なるも、傷なしと謂ふべからず、

○人相與に處れば、自然に染習す、貞觀政要

○朱熹曰、精神一たび到らば、何事か成らざらん、

○人一たびして之を能くすれ

は、己は之を百たひす、中庸

○朱熹曰、謂ふこと勿れ今日學はすとも來日ありと、謂ふこと勿れ、今年學はすとも來年ありと、

○書を讀むは必專一に

一字を寫すは必敬む一一、程董學則

○少くして勤苦せされは、老いて必艱辛あり、省心雜言

○少くして勞に服すれは、老いて必す安逸なり、同上

○貝原篤信曰、萬の事初に惰れは、後に功なし、

○年長する以て倍すれは則父とし事へ、十年長すれは、則兄とし事ふ、禮記

○長者より物を賜へは、辭

すること勿れ、同上

○長者より問るゝことあらは、對ふるに實を以てし、敢へて欺き僞らす、童子習

○兄及姉は、皆我か尊屬た

り、宜しく敬して怠ることなかるべし、（仝上）

○長者に道に遭ふ時、我車馬等に乗らは、必下りて長者の過くるを待つ、（同上）

○佐藤坦曰、我恩を人に施しては、忘るべし、我惠みを人に受けては、忘るべからず、

○貝原篤信曰、人の飢ゑたるを救ひ、人の病めるを助くべし、

○又曰、人の害を除き、人の利益を興すべし、

○程頤曰、學ぶ者は必師を求む、師を求むるに慎ますはあるべからず、

○貝原篤信曰、道を教へ師は、其の恩最重し、君父と同じく、尊ぶべし、

○又曰、技藝の師も、亦我に恩あり、敬重せずはあるべからず、

○分外の事には、一毫も與

一からす、從政名言

○今川貞世曰、君父の恩を、忘るゝこと勿れ、忠孝の道を、失ふこと勿れ、

○心を盡して、上に奉する、之を忠といふ、書經疏

○藤原肅曰、子の親に孝養するは、是子の職分内の事を盡すなり、

○呂坤曰、親に事ふるものは、勞倦の態あるへからす、愁苦の態あるへからす、

○祖父母は、最尊しとす、次きは則伯叔父母なり、童子習

○司馬光曰、凡卑幼者は、事大小となく、專行ふこと勿れ、必家長に資稟せよ、

○凡長者と言ふ時は、始は面を視、中は懷を視、終は面を視る、小學

○楠正成曰、學問を怠ること勿れ、言行を亂ること勿

れ、

○明の倪文節曰、書を觀ること一卷なれは、一卷の益あり、一日なれは、一日の益あり、

○玉琢かすしては器を成さす、人學はすしては道を知らす、禮記

○木下貞幹曰、己不善にして、人之を譽むとも、喜とするに足らす、

○又曰、己善にして、人之を毀るとも、憂とするに足ら

す、

○人の長短を語ること勿れ、無益の談を爲ること勿れ、程董學則

○人の惡を顯すこと勿れ、己の長を說くことなかれ、同上

○王通曰、君子は、先きに擇ひて後ちに交る、小人は、先きに交りて後ちに擇ふ、

○貝原篤信曰、己を責むれは身修まり、人を責めさ

れは、恨を招くことなし、
○范益謙曰、人と並ひ坐して、人の私書を窺ふ〻からす、
○又曰、人の家に入りて人の文書を看る〻からす、
○貝原篤信曰、善には進み難く、惡には趣き易し、慎む〻し、
○卜部兼好曰、心中に安んせざることは、多くは爲さゝるに利あり、
○自敬すれは、人も亦之

を敬す、讀書録

○自慢れは、人も亦之を慢る、同上

○佐藤坦曰、愆を免るゝ道は、謙と讓とに在り、福を求むる道は、惠と施とに在り、

○貝原篤信曰、思案せさるは、過の本、私欲ふかきは、身を亡す基なり、

○卜部兼好曰、人平生の氣象は、寧靜にして、和易なる

を貴ふ、輕譟を戒むへし、

○晝の爲る所は夜必之を思ひて善なれは則樂しみ過あれは則懼る、省心録

○人藥の病を理するを知りて、學の身を理するを知らす、抱朴子

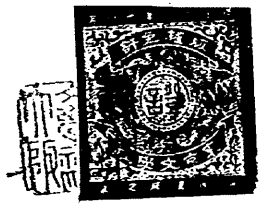
○學問は山に登るか如し、怠れは日々に下る、靜寄語録

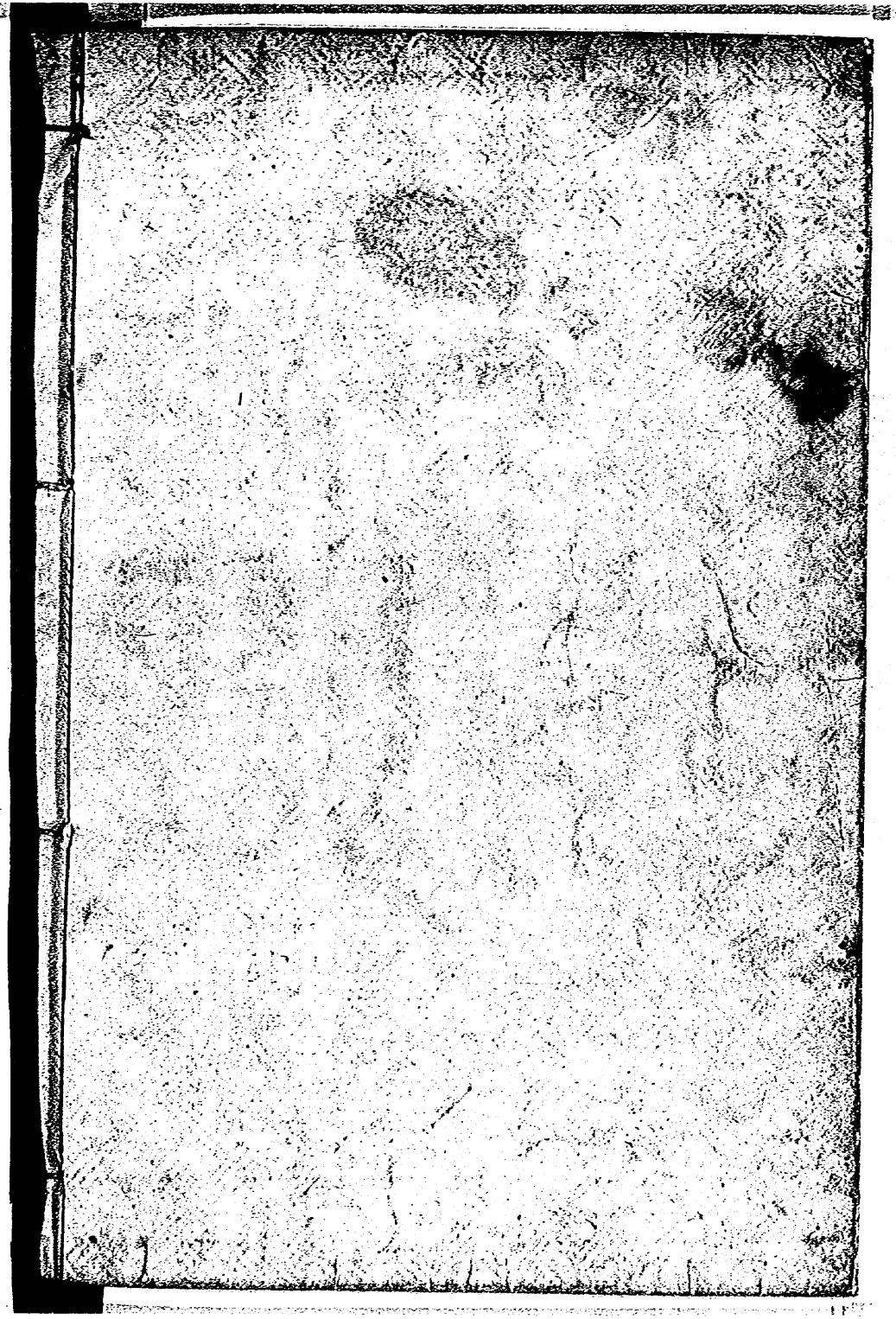
○貝原篤信曰、前食未消化せされは、後食相繼くへからす、湯は熱きを冷し、適度

を待ちて飲むべし、

和漢修身書卷之二 終

明治十五年十一月十六日版權免許
同 十九年二月 出版
同 年十月十八日別製本御届



編纂 福井縣士族 山内貢 東京京橋區采女町二十一番地

出版 文學社 東京日本橋區本町四丁目十六番地